

## TOKYO2020 オリンピック大会ボランティア・レポート

コロナ禍で賛否両論さまざまな意見があり難しいオリンピックとなった。大会の陰の支えとなるボランティアには大会ボランティアと都市ボランティアとあるが、後者は来日客がほぼゼロということで3万人余の出番がなくなってしまった。大会ボランティアの自分も申込時には「広報・メディア」部門ということだったのが晴海の選手村に配属となった。海外選手と“密接”な触れ合いはできなかったけれど、結果的に言葉での交流はある程度できたのはラッキーだった。以下、5日間の活動の記録です。

### ボランティアに参加する大義名分

- 「大義名分」なんて少し大げさな言葉を使ったが、オリンピックに対して国論が二分し反対者も多いなか、自分がボランティアに参加する意義を事前に改めて確認する必要があったから。
- ちょうど10年ほど前「東京で2020年にオリンピックが開催される」と知ったとき「よし、自分もボランティアとして参加しよう」との思いが起きた。
- その後、信濃町にある世界平和を祈願する広宣流布大誓堂に世界各国から来日するSGI（創価学会インタナショナル）メンバーのアテンドをしていて、その志向がより強まっていった。
- 勤行会の案内を英語と時にスペイン語で伝え、横田基地にいるアメリカ人メンバーのサポート、さらに昭島市が運営するシニア向け英会話教室の講師としても役立つ電子辞書とポケトーク（通訳器）を買った。いつかオリンピックの時にも、との思いもあったからだった。
- 海外滞在10年余り、訪問した国が40カ国以上、各国事情や文化比較なども綴り講演もしてきた。幸い2カ国語ができることは来日外国人をおもてなしするにはきっと役立つかも、と自負するようになった。
- 4年ほど前には東京都観光ボランティアにも登録し、新宿駅周辺と都庁の展望室で外国人観光客の案内にあたった。最終的にはそれもオリンピック・ボランティアに通ずるだろう、との気持ちもあったから。
- 3年前にオリンピック大会ボランティアの募集に応募した。英検準一級、TOEIC 835点、西検二級、DELE（スペイン文部省の試験）中級はそれなりに評価されたと思う。「広報・メディア」部門に申し込みOKとなった。（自慢になるようで恐縮ですが、申請に当たっては、各言語の資格証明書の提出が求められていたからです）
- さっそく都内で研修会が始まり3回参加したが、今年の1月からコロナ感染を避けるためオンライン研修となった。こちらは5回。
- やがて大会は1年延期となり、感染者が拡大していくなかで「開催反対」「再延期」といった世論が半分以上を占めるようになった。
- こうしたなか、担当場所が発表されたが「広報・メディア」部門からは外れ、晴海のオリンピック村と決まった。高齢を理由に比較的ゆったりとした部門に配属されたのかもしれない。でも選手と直接触れ合う機会があるのは楽しみだ。

- 幸いにも初出勤の 10 日前には 2 回のワクチン接種を済ませることができ感染回避の安心感につながった。一方「更衣室がないので自宅からユニフォームで」との指示には、周りに反対者がいる中で気になる点でもある。
- ボランティアは、世界最大の「平和の祭典」を支え、不安と複雑な気持ちで来日する選手たちへの「おもてなし」で日本の評価を高めていくことに変わりはない。ボランティアのモットーである「私は輝く」で頑張りたい。
- オリンピックは、これまで学んできた外国語を活かす最後の舞台！その体験は今後のシニア向け英語講座、世界文学紀行の講座などいろんな面でユニークな題材になっていくだろうことを期待したい。

### 20210719 ボランティア活動初日

- ◇ 「初日に遅れてはいけない」と若干の緊張があったのか、前夜、目覚まし時計に加えてスマホも朝 5 時にセットしたが、その 10 分前に目が覚めた。
- ◇ ユニフォームに着替え、活動の無事とコロナに感染しないこと、それに十分な貢献ができることを勤行で祈り、卵かけご飯をかつ込み、家を 6 時 15 分に出た。青梅線の昭島駅から中央線で新宿まで。そこで大江戸線に乗り換え、勝どき駅で下車。そこからオリンピック村の入り口まで徒歩 20 分。さらにそこから村内の一番奥にある集合場所まで徒歩 20 分でちょうど 8 時 30 分に間に合った。家を出てから 2 時間 15 分。目立たないようにユニフォームに薄い覆いを着てくる仲間もいたが、自分は目立つ紺色の帽子を折りたたみ小さなバッグに入れ任地に到着した。（参考までに交通費は JR 区間が 470 円、東京メトロ区間が 270 円、計 740 円。往復で 1480 円。後日支給されるという交通費は一律に 1 日 1000 円）
- ◇ 入村のチェックは厳しく、体温測定と accreditation card<入場許可証>の器械チェックと顔写真の照合。最後に空港のようにボディと荷物チェック。続いてボランティアの受付デスクで先のカードを出し出勤の登録。昼食券、飲料水ボトル 1 本、熱中症予防のための塩分入り錠を受け取った。
- ◇ 選手村のボランティアには主に三つの任務（受付サポート、I&I サポート、人の誘導）があり、本日の任務は I&I (Inventory and Inspection)。つまり選手が泊まる部屋に必要な備品がそろっているか、また不備や損傷はないかといったチェックである。
- ◇ この部門に割り当てられたボランティアは 30 人余り。責任者のスタッフによると「大部分の選手の入村は昨日までで終わり今日の仕事は比較的ゆったりです」とのことだった。自分は他の二人(女性)と組みスタッフの指示に従って動いた。
- ◇ 訪れたのは今朝、アフリカのザンビアから到着したばかりの選手の部屋だった。疲れ切って眠そうなところにお邪魔して申し訳ないような気持ちもあったがやむを得ない。規定であり任務だから。部屋にいる選手が大きなトランクを開けて中の整理をしていたが、カラフルな衣装や下着まで山と出てきて“さすがにアフリカだなあ”との印象を強くした。対応したザンビア側の責任者は身長 180 センチほどの黒人選手。医師の資格もあるみたいでこの棟の医療室の器財も一緒に立ち会いチェックした。英語に若干のなまりがあり自分は理解できない点も多かった

が、責任者の若いスタッフは慣れていて、テキパキと事を運んでいるのには感心した。

- ◇ 午後 2 時。ボランティアとこの村で働いている日本人を対象とした食堂で昼食をとった。朝受け取った食券を提出する。この日の定食は紙皿にのった魚の揚げ物一品と豆類の煮たもの、野菜サラダ、ご飯、野菜の入った薄味の味噌汁、それに好きな飲み物のボトル 1 本、デザートとして小さなアイスクリームだった。
- ◇ 50 メートルほど先には選手用のメイン・ダイニングホールがある。アクリル板で区切られたテーブルに 1 階、2 階を合わせて約 3000 席があり、世界様々な食文化に合わせた調理がされており、日本食を堪能できるコーナーもあるという。「という」との表現はボランティアは入ることができないから。チョッピリ雰囲気味わいたい気持ちもあったのだが・・・)
- ◇ 予定の終了時刻は午後 3 時だったので食事後の解散となった。初日で分からないこと、慣れないことも多く戸惑いもあったがなんとか第一日目を終えることができた。

### **20210720 ボランティア活動第二日**

- ボランティアとしての仕事は朝 7 時から夜 11 時までであり、おおむね前半出動と後半出動の 2 体制に組まれているようだった。今日の自分の出動は後半の午後 3 時から 11 時までの予定だった。
- 細分化された 8 人が 2 グループに分かれて二つの作業をした。ビレッジが川の出口と海に近い土地柄、水はよどんでいて蚊もいるようだ。そこで電池式の蚊取り線香を 21 ある各棟の入り口付近や全てのエレベーターの中に 2 個ずつ置いて歩いた。
- エレベーターに乗ってきたアルゼンチンの選手が問いかけてきた。「それなに?」。懐かしいスペイン語を聞いて私もスペイン語で返答をした。「皆さんが蚊に血を吸われないためですよ。人気者の皆さんは何にでも好かれますから」。「ドウモアリガト」。片言の日本語が返ってきた。外国の地で母国の言葉を使ってあげることがどれほどその外国人をホッとさせることか、と勝手に推測したものだった。
- 数日前にコロナ対策用のキットを滞在の全ての選手宛てに配布したが、まだ取りに来ていない選手がいる国があるようだった。そこで 1 階ロビーの指定箇所(テレビの下)に置かれたままのキットを見つけたら本人の手元に届くよう手配するために、再び手分けして全 21 棟を回りチェックした。
- 本日は午前中にいくつかの国の選手の入村はあったが午後はゼロ。任務は夜 11 時までということになっていたが、全ての業務が終わった段階で午後 7 時にフリーとなったので昨日の食堂へ行った。今日のメニュー豚の竜田揚げと蒸した白身魚、野菜サラダ、インゲンのゴマ和え。デザートのアイスクリームも小さなカップに入っていて昨日の昼食よりやや質が上がっているように感じた。昼食と夕食の違いかもしれない。
- 開会式 3 日前で選手の入村は 9 割方終わり、village (村)内も各国の選手たちが行き交い賑やかになってきている。メイン・ダイニングホールの前の広い道路の両

側には 200 メートル余りにわたって各国の国旗がカラフルにはためき、14~18 階建ての合計 21 棟(宿泊施設)の窓辺や壁、ベランダにも国旗や国名が賑やかに貼られている。カラフルでまさに「世界がここに集まっている」との実感。素晴らしい写真も撮れそうなのだが、ボランティアは村内で知ったことを SNS 等に投稿してはいけない、写真を撮ってはいけない、といった制限がありお見せできないのは残念ではある。(最後のページにある写真は「せっかくなので」と個人の記念に撮ってもらったものです)

### 20210722 ボランティア活動第三日

- I&I のサポートの三日目。午後 3 時から 8 時まで。開会式も翌日に迫り、選手は殆どが来日し部屋の設備品のチェックの仕事は一昨日より減ったようだった(昨日は自分の活動休みの日だった。炎天下での連日の任務となると肉体的にも大変なので、基本的に 2 日担当したら 1 日は休むスケジュールに組まれている)。
- それでも 3 カ国ほどからの到着があり自分のチーム 3 人はマダガスカルを担当となった。アフリカの東側海岸のはるか先のインド洋に浮かぶ国である。島といっても日本の国土面積の約 1.6 倍の広さを持ち世界で 4 番目に大きな島。
- 言語はフランス語だと思っていたが、なんとマダガスカル語でという。日本国内全部でもマダガスカル語をできるなんて人は極めて稀だろう。そんな状況下に強力な助っ人が現れた。各国の選手の面倒を見るボランティアの中に一人いた。20 代後半と思われる M さん。彼女は青年海外協力隊でマダガスカルに 2 年滞在し現地の人と交流を持ってきたという。そこで通訳兼チェック作業を選手を中心者としてくれた。我々はときどき指定の備品に手を出すくらいでその模様を遠巻きに眺めているしかなかった。
- お互いに心の通い合うというのは強いものだ。40 代くらいの人良さそうな壮年の中心者との話はとても和やかに進み 1 時間ほどで全ての業務を終わることができた。

### 20210723 ボランティア活動第四日

- 今日は初めて「受付②」との部門の担当となった。午前 9 時から午後 2 時まで。一言で言うとホテルの受け付け兼雑用係みたいなものである。4 人のチームで担当場所は 15 号棟だった。
- 任務は宿泊している選手の全ての要望に対応してあげること。「エアコンが故障している」「アイロンを借りたい」「会議室の予約をしたい」「バスタオルと枕カバーをください。アッ、トイレトペーパーも」等々。難しい受付はもう何回も経験があるという若い仲間に任せて初回の自分は最も簡単な「バスタオルやトイレトペーパーの受け渡し」担当となった。一人で仲間の分も持ち帰る選手もいて、50 枚以上のバスタオルの山がどんどん減っていく。足りなくなる前に自分で別部屋から出し折りたたみ取りやすいようにしてあげる。選手の国名が分かると「頑張ってるね！」的な言葉をその国の言葉でかけるようにした。
- この棟にはスペイン語圏からはベネズエラとキューバの選手が宿泊していた。自分はどちらの国も現役時代に特派員として訪問している。そこで彼らが来ると

「ようこそ日本にいらっしゃいました。実は私も現役時代に貴国を訪問しているんですよ」とスペイン語で声をかけると、たちまち打ち解けて会話が弾んだ。どこかで選手に役に立っている、との嬉しい実感だった。

- 任務が終え帰り際に外の木陰で休んでいると、今度はスペインのユニフォームを着た女性が近づき声をかけてきた。「これいかがですか?」。シャツの襟などに飾る小さな国旗のバッジである。私は定年後にスペインの大学に留学したこと、ドン・キホーテの舞台を訪ねりレポートを書いてきたことなどを伝えた。彼女はバルセロナの出身。出場種目はカヤックで別の練習地にいるが今日は夕方から開会式があるのでこのオリンピック村で合流するために来たのだという。夜の集いをとっても楽しみにしているようだった。

#### **20210723 オリンピック開会式** (ボランティアとして参加はしていませんが記録として)

- 開会式は自宅のテレビで観賞した。この稿を読まれるほとんどの皆さまもご覧になり新聞の記事にも目を通していると思うので、57年前の東京オリンピックと対比して感じた点のみここに記すことにします。
- 今回の参加国は206カ国・地域だという。57年前、1964年の東京オリンピック時は93カ国・地域だった。半世紀余りの時代と世界の変遷が表出している。競技の種目も過去最高というが、国の数だけから言えば倍増である。入場行進での各国紹介を見ていると、世界地理に比較的強いと自負している自分ですえも知らない国や地域がずいぶんあった。
- とりわけ分からなかった国や地域はアフリカ、中・東欧、カリブ海方面と南太平洋の島々。アフリカは1960年代から70年代に多数の国々がヨーロッパの宗主国から独立した。中・東欧もソ連の崩壊などが起因となって名も覚えられない多くの国が誕生している。カリブ海方面もこの半世紀の間に独立した国もあり、また人口数十万の島が「地域」として選手を送り出している。南太平洋からの参加者も同様だった。民族衣装をまとった代表団も多くこの多様性は見ているだけでも楽しい。
- そんな世界からの参加者が、閉会式ならまだしも開会式でも、くだけてスマホで写真を撮り、踊りながら行進している姿に54年前の肅然とした入場行進との違いが映り出していた。

#### **20210726 ボランティア出動第五日**

- 23日と同じ時間帯で同じ第15棟の担当となった。前回も見慣れたボランティアの若手女性の動きが目立つ。来室した選手の要望を聞くとテキパキと対応。会議室の使用申し込みも多く、申請書類を見ながらパソコンに打ち込み日時を調整。ほぼ毎日ここに“出勤”している感じで英語も自分などよりはるかに練達である。“老兵”は一步引いて今回も複雑なことの少ないバスタオル、手拭きタオル、枕カバー、ベッドシーツの管理と受付での手渡しに当たることにした。
- 途中でキューバ国の3人がやってきた。スペイン語ができる、貴国にも行ったことがある、との触れ込みから話を聞いたが少し微妙な内容だった。「抗生物質の薬はどこで手に入りますか?」と。コロナ禍である。微妙な質問だったので私は「まずは保健診療センターでドクターに診てもらってからの方がいいと思います

よ」と返答した。ビレッジ内の地図は手元になかったので、たぶん選手用の案内書にはあると思いそれ以上調べなかったが3人は「グラシアス（ありがとう）」の言葉と共に帰った。うまく医師の診断を受けていることを祈るのみ。他には宿泊の他の選手と言葉を交わすような機会はなく英語で「おはようございます」「ようこそ日本へ」「東京滞在を楽しんでください」といった言葉を投げかけるだけだった。

- この5日間の感想だが、滞在している各国選手の背の高いこと！10人に1人以上は身長2メートルを超えているように見えた。バスケットやバレーボールなどは当然だが他の競技でも身長は体力に通じている。年を取り、身長が若いときより3センチ近く低くなりぎりぎり160センチを切った自分などには、まさに見上げるような巨人が村内を歩いているように感じられたものだった。

### ボランティア活動の総括

- ボランティアとしての活動日と時間の予定は1ヶ月ほど前にメールで届き、そこから都合の悪い日を除いて申告するシステムだった。自分の場合、全部で10日間活動の予定で返信した。だが最終的にそのうちの8月分をキャンセルした。何回かビレッジまで通ってみて遠いことが身にしみてきたからだった。
- 当初の予定では8月にも予定が入っていたが、いずれも朝7時集合だった。となると昭島駅を4時半前の始発電車に乗らなければならない。猛暑と年齢を考慮し申し訳なかったが責任者に申し出た。さすがに80歳の高齢にはキツイことが実感されたからだった。「わかりました。お身体を大事にしてください」と丁寧な応答。（1年延びたが故に、70代だった自分も80代となってしまっていたのだ）
- 活動に際しているんな準備をしてきたが、まずは英語、スペイン語の研鑽だった。年齢と共に忘れ衰えていく語学力をどう維持していくか、更にはどれだけ伸ばしていけるか心がけてきた。英語はNHKラジオの語学講座の聴講（これはシニア向け英会話講座の役にも立った）とアメリカSGIの機関誌「World Tribune」と「Living Buddhism」を購読し文中の単語や表現をメモノートに記した。
- スペイン語は2年前のパナマ訪問の時に復習したが、それを再度確認し、手元にあるスペイン語関係の本の全てをチェックしながらノートを作った。更に自分のHPのスペイン語のページに載せている「定年留学のススメ」「ミニ自分史」、それにいくつかのエッセイをスペイン語のリズムに慣れるために声を出して読んだ。
- 体力作りも重要なので、コロナ禍で始めたウォーキング（5～8千歩）を毎日と水泳を週1回、それに年5回ほどのゴルフにも参加した。（テニスは1年前にギックリ腰をして以来、走ると腰が痛くなるので当面やめている）
- 準備万端で参加したつもりだったが、結果的に外国語についてはあまり活用・貢献できるような場面はなかった。宿舎内の施設の点検や各棟の受付で補助的な仕事が多く、スペイン語圏の国からの選手を言葉でもてなすような機会も少なかった。参加205カ国のうちスペイン語圏の国は20以上ある。それらの国からの選手が各棟に宿泊するので、その日の状況に応じてボランティアが各棟に振り当てられるシステムだと、こちらの希望を反映するのはもともと無理なのだ。

- 今、振り返ってみるに、コロナ禍で国論が二分し、運営側の失態からボランティアのキャンセル者も多数出たなかだったが、世界 205 カ国地域から多数の選手が集った。その彼らの生活のど真ん中にいられたことは「貴重な経験を刻むことができた」ととらえていきたい。オリンピック・ボランティアのモットー「私は輝く」には届いていないけれど、タオルや寝具の折りたたみや受付での手渡しの際、英語で声をかけ、またスペイン語圏の国からの選手にはジョークも加えた「おもてなし」の一端でもできたことは、そのモットーに通ずるかもしれない。さらにこの経験が今後の人生で、またシニア向けの英語教室や世界文学紀行の講座などで役に立っていくことも期待したい。

(写真：左上：選手村の一角で海外選手に撮ってもらう 右上：棟に宿泊している選手の国の国旗や国名が壁に貼られている 下：選手村のメイン道路にはためく世界の国旗)

